

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	環境（二等賞）
Author(s)	歳川，満雄
Citation	龍南， 1 9 1： 1 0 - 1 4
Issue date	1924-12-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8741">http://hdl.handle.net/2298/8741</a>
Right	

## 環

## 境

(二等賞)

文一甲三 歲 川 滿 雄

清冽な水、透澄な大氣、そして土と人情の香り高き田舎には、古來多くの偉人が生れた。——田舎は神の作つたものだからである。利益増殖器の様な徒が湧出する、あの都會は成程惡魔が拵えたものに相違ない。『群集すればする程人間は腐敗する』。とルツツオも言つた。曾ては武勇を以て一世を風靡した平家の一門も、一度洛陽の花に親しみ藤家の縉紳と交るに及び、剛健の風は忽ち軟化して、又之を收拾すべくもなかつた。

環境と云つても、殊に幼時のそれは、後に至つて人の運命を色々にあやつる大きい搖籃である。ホーソンの『パイオグラフィカ』、『ストーリーイズ』中の物語りは、一面に於て這般の消息を裏付けるものである。孟子の母が、嬰兒の教育の爲めに、三度その居を遷した聰明さは、此親にしてよく此の子ありと感ぜしむるものである。

不可思議な運命の舟は、假令性格てふ竿の爲めに、右に動き或は左に進むべきものとしても、水流其他の外界の事情が、往々にして此の舟を自在に翻弄するともある。この世に人間が絶えぬ限り、運命と人性と環境程、密接な關係を有するものはあるまい。曲折波瀾を極めた、歐洲十八世紀史の骨子と言ふ可き二人の人物に就き、今自分は徐ろに追想して見度い。——人世の浮沈をさながらの繪卷物として之を生涯に展開したナポレオンと、秩序因襲を尙ぶ國に生れたネルソンとは、共に佛革命の潮頭に乘じて福運の途に上つた人物であるが、一は不世出の輜略に任せて世界征服を夢み、一はその野望を痛快に粉碎するの運命に立つた。剛勇と沈靜、理想主義と現實主義、此の兩者の性格は各自陸海の作戦上にも表れ、龍虎相搏つの戦績は、その英才と交錯して吾人に坐るなる感興を湧かしめる。幼少の頃より衆叢を遙かに抜いたナポレオンの才幹は、砲兵學校士官學校遊學中並びに、

彼が未だ純民權論者當時の、革命騒亂の環境と相俟つて、茲に他日、機を見るに敏、事を行ふに烈々たる猛將の器量を形成したのだ。全生を通じて自由と奔放、前進と征服を使命とした彼の性格は、英艦監視を逃れてのツーロン強襲、冒險的なエデプト遠征、愛國思想を煽つてロンバルチャ平原を平定した伊太利戰役、自力を恃みての英國侵入策、等に彼の面目を躍如たらしめてゐる。少時より貧困と多病を體驗し、叔父サクリングの手に養育薰陶せられたネルソンは、前半生は餘り多幸なものでなかつた。即ち彼は大才を抱き乍ら不合理な進級法のため、十八年間大佐に止つたり、西印度にて密貿易を告發した爲めに衆人の怨恨を買つたり、彼が誠忠正義の念は反つて彼に災ひして、一七八八年から佛蘭西革命に至る五年間は最も彼が鬱鬱不遇を嘆じた時であつた。されど暗澹たる前途に一閃の微光認められ、戰雲急を告げた一七九三年、海軍大臣の命を受けて勇躍一番して以來、彼の生活は飽迄地味に確實に、益々その眞摯さを加へ、其最後に至つては、始めて燦然と夕陽の如くその眞價を表した。只司令官としての彼が、故國の秩序因襲に蔽はれて、天賦の才を思ふまゝに伸す事、ナポレオンの如くを得なかつた事を思ふ時、環境の力が如何に運命を左右するかを痛感せざるを得ない。

次に四圍の地理的狀態は、その範圍が廣い丈、人情風俗に比して影響する所大なるは勿論である。周圍の事情因襲に反抗して之に打勝つとは或場合には必ずしも困難な事ではない。併し乍ら四圍の氣候に順應せず、自然を無視し、之を愛しない様な偉人を私は聞いた事がない。斯様な場合にも吾等は絶対に自然の偉大さを肯定しないわけにはゆかないのである。故郷の自然に愛着を感ずるといふのは、單に其處に生れた等といふ單純な動機からでなく、それと生活喜憂を共にして、その感化が無形の連鎖となつて、故の情愛でなければ、眞でないと思ふ。外界の自然が國民性に及ぼす影響を、歐洲の南北に就いて見るに――北方の露西亞芬蘭獨逸などでは、氣候寒冷で霧多く、自然物は色彩に乏しい。必然の結果として人間の外界に作用すべき力は、内部へ／＼と喰入つて著しく内省的瞑想的となる。眞面目と木訥は、古來北方人の通有性で、冷靜な理智と共に研究心に富む特性を成した所以である。それに比べて南歐は――澄み切つた天空には朝夕茜色に輝くアルプの秀峯が、いやが上にも人の空想をそゝり、沿岸には橄欖の葉が濃藍の海に映えてゐる。紫の葡萄と純白の大理石、何となく、カルな調和だらう。伊太利の古都には深紅のバラが咲亂れ、巴里は紅燈綠酒の巷を描き出す。すべてが生の歡喜である。だからラテン人の血には、情熱があり、抒情詩が

あり、陶酔の藝術がある。色彩の變化に富み、輪廓の分明な、香り高き南歐の自然は、著しく人の官能を發達せしめる。音樂繪畫の隆盛も即ち之が爲めである。又宗教上より見るも北方の嚴肅信仰的な基督教主義に對して南方は自由熱情的な異教主義を探り其他思想界文學上に於る劇然たる相違は皆、大自然てふ環境の差異によるのである。

更に轉じて東洋を觀察するに、——支那は先ず大陸である。流れる河は悠大であり、擴がる原野は無限である。その大陸に育つた支那人の宗教、藝術、國民性が悠大且悠長なる事は當然の理であるかも知れない。蓋し莊重なる地の教へ儒教や、古書に表はれたる根本的な倫理道德説等は、支那にして始めてよく產れたものであらう。古來、人口に膾炙せる幾多の漢詩は、その雄渾な點に於て、何れも天下の絶唱である事は疑ふ余地のない事である。大膽不敵な馬賊の横行も、滿蒙の原野にして始めて生命あり光彩ある様な氣がする。北は大陸に壓せられ、南は我九州人に脅かされ、峯細く地瘠せ水乾く、といった環境にある朝鮮は、寔に氣の毒である。力なき彼女が自己に頼るを得ず、自然に頼るを得ず、煩悶の末事大主義に走つたのも亦已を得ない道程であつた。不安と寂寞、それは永久に亡國の民の涙を誘ふ種であらう。一度大陸を離れて日本に渡ればどうであらう！濁る河は澄み山丘の線はなだらかとなり、こゝに山紫水明の郷が展開される。汀の波、松の風、野の鳥、すべてがさゝやかに生命を謳歌してゐるではないか。そして歴史はかゝる環境に苦痛の歴史であり得よう。恵れたる自然に柔順に従ふのが彼等の生活の基調であつた。加ふるに古き歴史に絡る神秘的な傳説神話は國民の自尊心を醸成し、彼等が信念の一中心をなしてゐる。最近日本を訪れた哲人タゴールはその日本觀とも言ふ可き談話の中に、次の如く述べてゐる。

『……併し日本に於いては前述の皮相的現象はあるが、その内部には、相互間の關係に深い／＼人間的靈感の潜在するのを知りました。皆さん御自身も此の人格的關係の存在を御肯定なさるでせう。例へば日本政府は、單なる政府でなく、一個の人格であります。日本の全文明そのものが人格的なのですから、若しその大きな表象として政府が人格的でないとすれば、それこそ何かの間違ひに相違ありませんもの。支那に於ては事物が悪くなる許りです。それは支那でも凡ゆる所で各人の人格的責任は認め合つてゐます。けれ共彼等は言ふのです。『我等の中心に或る無形の靈ある抽象物——それは共和國と呼ばれてゐるのです——を西洋から持つて來なくちゃだめだ。』と。共和國政府、なる程それは歐米諸國には適當かも知れませんが。歐米人は個人の幸福

てふ事は念頭に置いてゐない。彼等の望む所は只能率許りですから。

そこへ行くと流石、日本人は支那人の様なことは言つてゐられない。否諸君は寧ろ『人間的といふ事が根本でなければならぬ。その中軸でなければならぬ。否すべてでなければならぬ。』と言はれるのです。日本の全文明は人間主義の勝利を高調するのです。……云々」と。

鋭敏な洞察眼を有する、タゴール翁の言の一端にも表れた如く、我大和民族の魂が眞に靈感的分子に富んでゐればこそ、建國以來その恵まれたる環境と、相互に感化し合つた事は並大抵でない。吉野の山櫻を以て、我國民精神を表象し得て遺憾ないのも敢て偶然の一致ではないと信ずる。祖國を抱擁せるこの秀麗な自然と、光輝ある歴史は、我國に於ては殆んど第二義的の域を脱して、今日の日本帝國の特色ある存在に、必要にして欠くべからざる條件であらう。

國家てふ大きい環境の考察が必要になると同時に、その圓圈を縮小して自己に近接なる環境を、吾々は更に凝視せねばならないそれは暫て貴重なる自己直視であるのだ。

吾々は今、人生の航路に就くに當り、高校生活なる特殊な雰圍氣の中にあつて、若き船夫がときめく胸を抑えて船出の支度にいそしむが如き誇らしさを感じる。思ひ出すこの春、あの櫻並木の下では、なびらの洗禮な受けてこの方、過去の努力に對する報ひとして與へられた青春の序曲、それは確かに幸福な華やかなものに相違なかつた。吾々を取巻く九州の自然は、慣れるに従ひ親しみと懐みを感じるのである。何事をも豫知し知悉した様な瞳の有明海、一見無愛想を極めた阿蘇、小楠の眠る沈黙の原、又は瘡癩持ちの白川等、この古武土的な熊本の面影を象る自然である。大陸性の氣候も亦、人生の首途に於ける天の試練ではあるまいか。その落付いた山姿や草木は、人間の饒舌や喧噪を冷笑するかの如く、南國情調を豊かに湛えた鮮明な色彩も、決して安價なセンチメンタリズムを許さない。傳統的歴史に苦むした古色蒼然の寂びは、上づつたる人心を引締めてゐる。其等力強い環境に始めて逢着した時、その前に自分は幾何程、自己の姿の淡いのを恥ぢた事か。龍雨を形成する一要素たると共に、自己を捉へて強調せんが爲め、吾々の心底には常に一種の悩みがある。

次に吾々は飽く迄環境を理會せねばならない。眞の理解は即ち愛であるから。この龍雨を圍繞するすべての事象や、微妙な空

氣の流動激發を透して、少しでも高校生活なる姿に觸れ、之を十分に咀嚼するのだ。そして折にふれ、我龍南人が最も東洋人的氣質を多分に具えてゐる事等發見する時、貧弱なこの魂の何處かにも、一脈の響きあると覺ゆるのである。

斯く論じ來る時、人間は如何に環境の爲めに、其運命や性格や力を左右されるものであり、従つて大きく言へば、『自然と人生』との關係に吾々が、常に眞剣な態度を取る可きは、自ら明らかな結論である。昔時、陳蔡の野に飢えた孔子、ヨルダンの谷を放浪したキリストの如き強烈な意志の所有者は、往々にして境遇の叛逆者として最後迄闘つたが、近頃の複雑な社會制度の下では、自然に順應するは勿論、社會てふ有力者の爲めに絶えず引き摺られて行くのが、蓋し近代人の大いなる悲哀であらう。